

ラグビーワールドカップ2019 日本大会

「埼玉県・熊谷市」開催にむけて（下）

日本ラグビー史上に残る埼玉県の名選手達

ぶぎん地域経済研究所 取締役調査事業部長 松本 博之

埼玉県が生んだ“日本ラグビー史上最高のスクラムハーフ” 2人
選手、監督として実績を残した宿沢広朗

日本ラグビー史上最高のスクラムハーフ（SH）、それも一人ならず2人まで埼玉県が輩出したことに異論を挟むラグビーファンは、少ないであろう。日本ラグビー史上に燦然とその名を残す2人の埼玉県が生んだスクラムハーフ、宿沢と堀越の両選手を紹介する。

宿沢は1950（昭和25）年、東京都日野市生まれだ。電気機械メーカーに勤務していた父親の転勤で中学生になるころ、埼玉県吹上町（現鴻巣市）に引っ越してきた。学校の成績は常にトップクラスで、担任教師から浦和高校への進学を薦められるが「浦和は遠いから…」と県北の進学校、熊谷高校へ進学する。中学では野球部で活躍していた宿沢だが、高校に入るとラグビー部を選んだ。大学時代で身長162センチ、体重60キロという小兵からも、野球の継続に限界を感じていたのかも知れない。「野球やサッカーは中学時代から鍛えている人が多い。同じ条件で始められるラグビーしかないと考えた」と語っている。入部早々、砂場でダイビングパスの練習を繰り返す姿が印象的だったと当時のチームメートは語る。その姿を見てチームメートたちは、宿沢の才能や将来性を十分に感じていたという。ラグビーの練習の中で、宿沢は自分の性質、体格や運動能力にピッタリのスクラムハーフというポジションを知る。熊谷高でも学業優秀であった宿沢はラグビーを続けながら、現役で早稲田大学政経学部合格する。しかしながら入学、即ラグビー部とは行かなかった。

宿沢の大学入学後からラグビー部入部までの経緯には諸説ある。当時のチームメートの話によると、「いつも東伏見（東京都西東京市）にノートを持って練習を見に来ている奴がいる。ひょっとしたら明治大学のスパイじゃないか？そこで捕まえてみると練習内容を分析し、ノートに書いていた。練習内容についていろいろ言ってくる。そんなことを言うのなら練習に来い。」という、ラグビー部入部のいきさつらしい話がある。また東伏見ラグビー場で宿沢の姿を見ていた新聞記者は、「宿沢は、中央の木製スタンドに座り練習を見る日々を送っていた。練習の内容を見て、自分の力で練習について行けるかを見ていたようだ。」と話している。

入部3ヶ月後の菅平合宿で、宿沢はスクラムハーフのレギュラーの座を獲得していた。名門ラグビー部では、1年生は二軍か三軍が普通だが、早稲田は実力本位で選んでくれたのが嬉しかったという内容の発言をしている。

宿沢の早稲田在学中、2年時に新日鐵釜石を、3年時に三菱自工京都を破り、日本選手権を制した。とくに三菱自工京都との試合は、宿沢にとって忘れられない試合となった。大学選手権準決勝対同志社大学戦で内臓を強打し、試合中に意識不明となり病院送りとなっていた宿沢は、この試合の2日前まで病院のベッドで絶対安静状態であった。歩くのさえやっとという状態から当日、グラウンドに姿を現した。14-11の激闘を制し35連勝を記録した早稲田大学、表彰式の宿沢は立っていることすら出来ないほど消耗していた。

研究熱心であった宿沢は、過去に囚われず新しい戦法を考え、失敗を繰り返しながらもあきらめず実践していった。それは従来のスクラムハーフのイメージを変え、自らボールを持って走ったり、キックをしたり多彩な動きをした。

4年生となり主将になった。宿沢は、「本当をいうと、キャプテンはやりたくなかった。」と述懐している。持論である「主将はなるべく敵に近いポジションが適している」に反するわけだ。自分のポジションであるスクラムハーフについて「もっとも主将に適さない」、いちばんボールを持つ機会が多いポジションだけに、自分でなんとかしなくちゃと思うと適切な判断が難しくなるということである。

宿沢は当然のごとく大学3連覇、その先の日本選手権3連覇を目指してシーズンに望んだ。しかしその前に立ちふさがったのが、明治大学であった。早稲田大学は、3連覇の祝勝会の予定が残念会となってしまった。「残り時間3分まで勝っていた試合を失ったわけですから、私のキャプテンとしての力量が足りなかったとしか言いようがありません。あの試合の時は終了間近になってどこかで“逃げ”の気持ちが働いてしまった。」と宿沢は肩を落とした。

多くの企業からの誘いを断り宿沢が就職先に選んだのは、運動部の有名選手を採用したことがない住友銀行（現在三井住友銀行）だった。「ラグビーは大学で十分楽しんだから」というのが断りの言葉だったという。住友銀行に入っても2年間は自主トレーニング等によって日本代表の位置をキープしたが、その後はプレー続行に固執しなかった。日本ラグビー史上最高のスクラムハーフの一人は、日本代表として3キャップ（代表戦3試合出場）でとどまっている理由である。

1989（平成元）年2月、大学の先輩で大学2年生の時の監督にあたる日比野弘（日本代表監督兼強化委員長）から代表監督への要請を受ける。その前年11月、韓国との代表戦に敗れ、辞意を表明していた日比野に対して、協会としては、密かに後任監督を探す必要があった。日本代表のスクラムハーフとして活躍しながら若くして引退し、ロンドンで住友銀行の為替ディーラーとして活躍していた宿沢に白羽の矢が立てられた。3ヶ月後のスコットランドとのテストマッチを控え、火中の栗を拾う形となった宿沢だったが、ロンドンから帰国後、スコットランド戦について聞かれると、「勝ちます」と宣言した。

1989年5月28日、宿沢監督率いる日本代表は、スコットランド戦において歴史的勝利を挙げる。スコアは28対24の辛勝ながら、トライ数は5対1で圧倒した。国際ラグビー評議会（現World Rugby）オリジナル加盟8か国から史上初の勝利となった。次に1991年第2回ワールドカップを指揮する。ジンバブエ戦で9トライを挙げて勝利、2015年ワールドカップでの3勝までの唯一の勝利となっている。宿沢監督が率いた1991年第2回ワールドカップでスクラムハーフを務めたのが、早稲田大学在学中だった堀越であった。

代表監督としては、2年8カ月、戦績は5勝9敗だった。対戦相手との得失点差などデータから見ても、宿沢の代表監督としての評価は高い。その後、住友銀行の支店長と兼任しながら1994年に母校早稲田大学の監督に就任するが、1シーズンで退任する。



2006年6月17日、登山中に心筋梗塞を発症し、急逝。(まだまだ日本のラグビー界の発展に、この人の力を借りなければならなかったが…) 享年55歳。座右の銘は、「努力は運を支配する」「勝つ事のみ善である」

天才、宿沢二世と言われた 堀越正巳

もう一人、埼玉県が生んだ史上最高のスクラムハーフ堀越正巳は、宿沢の18年後に同じ熊谷市内の高校から早稲田大学ラグビー部に入った。そして宿沢同様に1年生からレギュラーを獲得し、縦の突破力や意外性が似ているところから「宿沢2世」と言われた。

堀越も中学までは宿沢と同じように野球少年で、身長も166センチとやはり小柄であった。熊谷工高に入学後、全国大会出場の可能性が高い部活、ラグビー部の存在を知る。後に「ラグビーに出会ってなければ、どんな人間になっていたのか想像もできない」と堀越は語っている。

当時の塚田コーチ（後の監督）は、堀越のラグビー、スクラムハーフへの適性を見抜き、ひたすらパスの練習をさせたという。開脚したまま腰を落としてボールを転がして歩く練習で強靱な脚力と膝の柔軟性を身に着けた。

高校3年時の花園は、堀越にとって一生忘れられない大会となった。1・2年生時はどちらもベスト4、3年連続で出場となった第66回（1986年度）大会も順調に勝ち上がり、準決勝で優勝候補の大阪工大高を破り、決勝出場となった。しかし堀越にとって、そこに落とし穴が待っていた。雨の試合後濡れたジャージのままでの長時間インタビュー取材によって風邪をひき、翌日の決勝の朝に39℃を超える発熱となってしまったのである。体調不良を押して出場するも、前半で力尽きて交代。「堀越が万全でフル出場していたら…」今でも埼玉県のラグビーファンにとって口惜しい話題だ。この時のインタビュー取材が契機となり、取材の仕方が改まったと言われている。

熊谷工高への入学当初は、卒業後は就職と考えていたが、ラグビーでの活躍もあり、早稲田大学へ入学、1年生からレギュラーのスクラムハーフとなる。

小柄ながら堀越の動きは、「広いフィールドを一人で支配している」ように見えたという。堀越のブレのない正確無比なパスは、タックルを受けても味方に届いた。早速、才能を開花させた堀越は、1年時で11年ぶりの大学選手権制覇、続く日本選手権でも東芝府中を破って日本一にチームを導く。2年時には日本代表デビュー。1989年、伝説となったスコットランド戦にスクラムハーフとして出場している。監督は就任したばかりの宿沢だった。

1991年第2回ワールドカップでも、宿沢監督の下で実力を発揮した。2015年第8回ワールド

カップまで、同大会での日本代表の唯一の勝利であった対ジンバブエ戦で、堀越が攻守の起点となり、ラックからの素早いパス回しで9トライを挙げた。自らも大男たちのタックルをかわしながらトライを挙げている。

1995年南アフリカで開催された第3回ラグビーワールドカップで、現地メディアが放送した堀越の映像に、「He is shortest player in this tournament」という文字が挿入されていた。埼玉県が産んだもう一人の日本ラグビー史上最高の



スクラムハーフは、小さいながらも抜群の運動量、俊敏なパス捌きで大会の注目を浴びた。

早稲田大卒業後は更なる飛躍を目指して、当時の社会人チャンピオン神戸製鋼に入社する。スクラムハーフはポジションとしては、バックスに入るが、神戸製鋼では、「スクラムハーフはフォワードである」との指導を受け、フォワードとともに動くプレーを身に着けるようにした。「試合をコントロールするのはスタンドオフ（SO）ですが、スタンドオフが余裕を持って動けるように、ボールをつなぐのがスクラムハーフの役割です」との堀越の言葉がある。ボール出しのタイミングをコントロールするのがスクラムハーフの役割だ。堀越は味方がタックルをされた場所へ“瞬時”に到達し、タックルされた瞬間にパスを出す。このスピードの速さが堀越の最大の持ち味だった。神戸製鋼では、大八木や平尾といった日本ラグビー史上を飾るキラ星のような名選手とともに、日本選手権7連覇の要としてプレーした。その後阪神淡路大震災時にはキャプテンも務めた。神戸製鋼には8年間在籍し、30歳の時に「力をすべて出した。悔いはない」との言葉を残して現役を引退した。

1999年、地元熊谷に堀越は戻り、立正大学ラグビー部の監督に就任した。ラグビーへの情熱は全く衰えることなく、ラグビータウン熊谷の活性化のため邁進している。

浦和高から名門早稲田大学の主将へ ワールドカップ日本招致にも尽力 矢部達三

2015年、浦和高校の久しぶりの花園出場は、埼玉県の高校ラグビーに古豪復活を大きく印象付け、盛り上がりを見せた。1959（昭和34）年、浦和高が初めて花園の土を踏んだ時のメンバーで、その後早稲田大学で主将となり低迷していた早稲田ラグビーを日本選手権優勝まで導いたのが矢部達三である。

中学の先輩が浦和高ラグビーに所属、そのプレーぶりを見てゲームの激しさとスピードに魅了され、浦和高に進学すると迷わずラグビー部の門を叩いた。当時の高校ラグビーは現在のような県代表がそのまま花園へ行くのではなく、埼玉、群馬、新潟の3県代表による北関東予選を突破しなければならなかった。

矢部が入部した1959（昭和34）年の浦和高は春シーズンから強く、県予選で宿敵熊谷商工高（現熊谷工高）を倒し県代表の座をつかんだ。その後、北関東予選を突破して創部以来、初めての全国大会出場を勝ち取った。矢部は1年生ながらフォワードとして活躍、全国大会も出場している。その後、浦和高が再び花園の地を踏むのは、2015年まで54年間待たなければならない。

1962（昭和37）年に浦和高から早稲田大学に入学した。1962年、早稲田大学ラグビー部は、対抗戦グループのBブロック（一・二部制の二部に相当）に転落していた。そこでかつての“常勝監督”大西鐵之祐を再建の切り札として監督に迎えた。矢部らBブロックで戦ったシーズンに入学してきた者は“シボられ組”と呼ばれ徹底して鍛えたとされた。恒例の菅平合宿が終わった頃には、30人いた新生部員が15人に減っていたという。



“シボられた”成果によって、矢部は1年生でたった1人、その年の早明戦にフォワードの要、ロック（LO）として出場する。同年、明治大学はAブロック優勝しており、圧倒的に明治大学優勢の下馬評であったが、後半の早稲田フォワードの奮戦により17-8で明治を倒した。矢部は卒業まで4年連続で早明戦に出場する。

1965（昭和40）年、4年生となった矢部は主将になる。この年、対抗戦を7戦全勝で勝ち抜いた早稲田は第2回全国大学ラグビーフットボール選手権に臨む。順調にトーナメントを勝ち進み、過去5年間勝つことができなかった、前年決勝で相まみえた法政大学を16-0と完封して初の大学チャンピオンとなる。年明け、第3回日本ラグビーフットボール選手権で、当時社会人最強を誇った八幡製鉄と対戦した。一進一退の接戦の中、ノーサイド寸前にペナルティキックを得て、スコアを12-9とし、早稲田大学は初のラグビー日本一となる。

対抗戦グループ最下位、創設以来初のBブロック転落の屈辱から、早稲田ラグビーは見事に蘇った。早稲田ラグビーの復活もあり、矢部個人としては3、4年には年度の国内ベストフイフテンに2年連続選出される。

大学卒業後は、三菱銀行に入行しラグビーの第一線からは退くが、早稲田大学のコーチを務め宿沢ら後輩の指導に当たる。銀行退職後は日本ラグビー協会の要職を歴任、2011年専務理事や副会長を務める。

なかでもワールドラグビー（世界のラグビー統括機関）の理事兼エグゼクティブコミッティー委員として今回のワールドカップ日本大会の開催に奔走、開催に結びつけた。

埼玉県ラグー最多43キャップ、日本ラグビーの「中年の星」

松田 努

ラグビーファンにとって、松田努と言えば、長い後ろ髪を揺らしながらグラウンドから駆け上がる姿が目に残っていることであろう。20年以上にわたってトップレベルの力を維持し、日本ラグビー界の「中年の星」として親しまれてきた。2012年2月に41歳9ヶ月5日のトップリーグ最年長トライを記録した。日本代表としては43キャップを獲得。これは埼玉県ラグーとしては最多である。1991、95、99、2003年の4回、ワールドカップに出場した。

松田は、1970（昭和45）年、埼玉県岩槻市（現さいたま市岩槻区）生まれ。テレビドラマ「スクール・ウォーズ」に憧れてラグビーを始め、県立草加高校から関東学院大学に進学した。高校時代は無名のフォワードであったが、関東学院大時代にナンバーエイト（NO.8）からフルバック（FB）に転向した。180センチの長身とスピード力を兼ね合わせた松田は、若い頃から大器として期待されていた。当時はまだまだ新興勢力だった関東学院大を強豪へ道筋をつけた。関東学院大3年で初の日本代表入りし、卒業後は社会人の強豪である東芝に入社。1996～98年の日本選手権3連覇、2004～06年トップリーグ3連覇に中心選手として活躍する。

長い現役生活のなかで、本人も最も印象に残っているシーズンが2006年であろう。当時35歳の“最年長”バックスに入る松田は奮闘し日本選手権3連覇、2005-06年シーズン三冠（トップリーグ、マイクロソフト杯、日本選手権）達成をチームにもたらしたのである。



長らくラグビーファンに中年の星として親しまれてきた松田にも最後の日が来た。草加高校1年からの27年間のラグビー人生だった。引退の記者会見も松田がラグビーをどこまで愛していたかを彷彿とさせる。本人は現役続行を希望したが、チームの戦力構想から外れた。「ずっとラグビーが好きでいられた。『中年の星』と言われ、やっつけてよかったと思った」と現役生活を振り返るとともに、「未練たらたらという気持ちもあった」と正直に話している。現在は、ワールドカップ2019年日本大会のアンバサダーとなり大会成功のため全国を駆け巡っている。

日本ラグビーの将来を担う“大学生トップリーガー” 山沢拓也

山沢は熊谷市の出身、熊谷東中でラグビーを始めると共に、地元のサッカークラブであるFCクマガヤではフォワードを務めるなど中学時代は2足の草鞋を履いていた。

高校進学に際して関東の有力校のサッカー部からの勧誘を受けるが、深谷高校ラグビー部横田監督からの「2019年の日本代表を目指そう」という手紙を受け、また兄の勧めもありラグビーを選択し、県立深谷高校に進学した。

卓越した運動能力で1年生からスタンドオフのレギュラーを務め、深谷高を3年連続して花園へ導く。高校1年から「未来の日本代表司令塔候補」と言われてきた。

高校2年時には高校日本代表に選ばれ、イタリア・フランス遠征に参加した。2012年6月、高校3年時には、ジュニアジャパンに選ばれ、同7月日本代表強化合宿メンバーに選ばれた。エディ・ジョーンズ監督は、柔らかなパスさばきに惚れ込んだ。本人は「自分の何がすごいかわからない」、「反省することばかり」と首を傾げるという。

「彼は（山沢は）、超ネガティブ。超完璧主義者で、ひたすら上手になりたい」という日本協会関係者の人物評もある。

大学は筑波大学へ進学、大学でも1年生からスタンドオフのレギュラーを獲得し、大学選手権ベスト4進出に貢献。順風満帆のラグビー生活であったが、大きな試練が立ちふさがる。当時、日本代表ヘッドコーチのエディ・ジョーンズから有望選手として評価を得て、「ワールドカップ2015イングランド大会へ連れて行きたい」とも言われたが、2年時から3年にかけて左膝前十字靭帯を断裂する怪我が重なり、長期離脱を余儀なくされた。

2016年8月、ジャパントップリーグのパナソニック・ワイルドナイツへの加入が発表された。筑波大学の学生でありながら、“飛び級”で史上初の学生トップリーガーとなり、2019年ワールドカップ日本大会でのチームの中心選手としての期待がかかる。2017年、社会人となった4月29日、秩父宮ラグビー場での韓国代表戦にてついに初キャップを獲得した。2019年ワールドカップ日本開催で背番号10を付けた彼の躍動する姿をピッチで見たいものだ。

参考文献

- 「宿沢広朗 運を支配した男」 加藤 仁（講談社+α文庫）
- 「宿沢広朗 勝つことのみが善である」 永田 洋光（文春文庫）
- 「埼玉県ラグビー協会誌」 埼玉県ラグビーフットボール協会
- 「大西鉄之祐ノート 荒ぶる魂 早稲田ラグビーの神髄」 大西鉄之祐（講談社）
- 「感動の昭和スポーツ史 13 ラグビー編」 ベースボールマガジン社 他

